氏　　名	陳　藝婕(CHEN, Yijie)
学位(専攻分野)	博士(学術)
学 位 記 番 号	総研大甲第 2291 号
学位授与の日付	2022 年 3 月 24 日
学位授与の要件	文化科学研究科　国際日本研究専攻 学位規則第6条第1項該当
学 位 論 文 題 目	日本で見た西洋:傅抱石が受けた西洋影響に関する研究
論 文 審 査 委 員	主　査　　磯田　道史 国際日本研究専攻　教授 タイモン　スクリーチ 国際日本研究専攻　教授 劉　建輝 国際日本研究専攻　教授 塚本　麿充 東京大学　東洋文化研究所　教授 稲賀　繁美 京都精華大学　国際文化学部　教授

（様式３）

博士論文の要旨

氏　　名　陳　藝婕（CHEN, Yijie）

論文題目　日本で見た西洋：傅抱石が受けた西洋影響に関する研究

本研究では、中国人画家の傅抱石（1904 年―1965 年）を対象とし、1940 年代以降の新画風と日本留学の関係性を解明することを目的とする。これまで取り上げられてこなかった新たな文献と図像の資料を併せて、綿密な分析を行い、先行研究では等閑視されてきた西洋的な要素に注目する。そして、日本留学中に習得した西洋に関する情報をきっかけとし、彼の画風が革新された実態について明らかにする。

このような視座から傅抱石を対象とすることで、通説となった見解を一変させるような、新規性ある仮説を打ち出すことが期待できる。特に、中国で論じられてきた傅抱石に対する認識を刷新し、傅における西洋的要素の重要性を改めて提示することで、その領野を新たに開拓したい。また、傅抱石は日本と縁ある人物であるが、日本の研究では使用される資料が限られているため、本論文では中国語の文献等を使用することで、日本における傅抱石像を更新することも目的とする。

そして、傅抱石が日本から受けた影響を検討するなかで、中国画壇との関係では見落とされてきた日本画家たちに注目する。例えば高島北海（1850 年―1931 年、元・フランスの林学・地質学留学生）、中川紀元（1892 年―1972 年、元・フランスの美術留学生）、清水多嘉示（1897 年―1981 年、元・フランスの彫刻留学生）などを取り上げ、日中美術史の展開に対して傅抱石がいかなる貢献をなしたのか、その価値について再考する。

まず、本論文は、およそ時代順に分け、傅抱石の渡日前（1934 年まで）、在日中（1932 年―1935 年）、帰国後（1936 年―1965 年）といった三部から構成される。

第一部では、傅抱石が渡日する前に行った活動を分析し、彼が留学した動機を明らかにする。主に、「全盤西化」の社会背景、留学の契機、援助者の身分や意図、傅抱石の「民族主義」的な言説といった四つの論点に注目する。先行研究では、日本画や日本所蔵の中国古画が彼に与えた影響、というテーマが集中している。しかし文献記録によると、彼の主たる動機は、日本を経て西洋由来の新たな知識を学ぶことにある。西洋美術理論、日本の洋画、日本に所蔵された西洋美術品、西洋風の要素を持つ日本画は、彼の留学経験の中で、重要な役割を果たしたと考えられる。このような見地から新資料を検討することで、留学期の経歴について、新たな見解を提示することが可能となる。

第二部では、彼が在日中に行った美術研究の方向性について分析する。1930 年代の日本画壇の状況や東京で開催された展覧会の内容、また傅抱石が在学した帝国美術学校にまつわる情報などのコンテクストに基づいて、彼の思想的な変遷について解明する。ここでは彼がどのような動機で金原省吾の東洋美術論、中川紀元の油絵、清水多嘉示の彫刻を学んだのかについて解釈する。

第三部では、帰国後の傅抱石が西洋的な要素をどのように画風に応用し、彼と同時代の人々や後世の研究者たちがどのようにそれを認識していたのかを問う。傅抱石の交友関係

を分析すると、彼は芸術の社会的な効用を重要視して、時流に応じて、意識的に画風の調整を行っていた経緯がわかる。傅抱石は歴史人物の「屈原」を描くことで、民族文化の英雄像を作り上げることに関与した。これは、従来の定説のように、日本画に啓発されたからではなく、西洋の「歴史画」概念が中国で受容された結果であることを、本論文では立証する。

また、傅抱石の画を分析すると、1935年までの作品は未熟で、伝統な様式に従っていることがわかる。新画風の成立は、中華人民共和国成立の 1949 年を境にして、二部に分けて検討する。1940年前後から、空気や光の存在感を強調する傾向が強くなり、実在の風景を写実する作例も増えた。よって、画面の効果や技法の具体的な分析を通じて、フランスの印象派やイギリスのロマン派との類似性を述べる。そして 1950 年代以降、社会主義リアリズムの風潮に伴い、傅抱石は地質学や旅行写生の経験を活かし、写実性の一面を一層強化したことを挙げ、これは高島北海の地質学画論に従い発展された結果であると指摘する。

以上から判明するとおり、傅抱石の西洋への関心は、1930年頃から最晩年まで変わらなかったことがわかった。彼は写実と抽象のあいだの振幅を縫いながら、東洋・西洋美術が融合する可能性を探求していた。一時的に抽象の野獣派に惹かれたものの、彼は最終的に写実に傾いて、外光派や地質学を選んだ。特に、イギリスやフランスからの影響は顕著である。具体的に、イギリス人画家のターナー（William Turner、1775年—1851年）や高島北海の『写山要訣』との関係性は注目に値する。1940年代、傅抱石は西欧のスポンサーたちの要望に応じるため、西洋要素を用いて「印象派」的な名声を発展させた。1949年以降は、西洋画家たちの評価を重要視しており、光・空気の表現や地質学式な写実理論に集中して取り組んだ。また、高島北海の地質学画論を基礎とし、傅抱石は地質学の勉強や写生旅行の経験を経て、独自の画風を成立させた。

傅抱石が生きていた時代は、「全盤西化」の思潮が中国で盛んだった。「中国美術衰退論」、「中国美術西来説」、及び1950年代以降の社会主義リアリズムは、伝統的な中国美術を存続の危機に晒した。傅抱石は「中国画」を守るために、西洋への関心を隠し西洋優位論に反論しながら、中国美術の伝統を再解釈・発展させることに専念した。彼や彼の周辺の人々は次のような論説で西洋的な影響を解釈している：光・空気・地質学などの要素は、中国古来存在していたものであり、「科学」の新知識を加えて、彼の新画風に発展された。
一方、1949年以降、外交環境の変化とともに、スポンサーの構成が変わり、西欧への進展も断念した。画評・宣伝文章の中で、西洋的な要素を強調する必要性もなくなりつつあり、これに関する言及が消えていく。このような複雑な背景があったために、これまでの研究では西洋的な影響に注目されてこなかったのだと考えられる。

結論として、傅抱石の画風革新は西洋的な要素の受容を中心に成立した。この新しい視点から、二十世紀前半の日本・中国・フランス・イギリスの美術交流の様相を一層明瞭にされる。異文化コミュニケーションのよい実例である

Form8・Separate Sheet
（様式８・別紙１）

Results of the doctoral thesis defense

博士論文審査結果

Name in Full
氏 名　　陳　藝婕（CHEN, Yijie）

Title
論文題目　日本で見た西洋：傅抱石が受けた西洋影響に関する研究

本論文は、中国の国画（中国画）画家・傅抱石（1904～1965 年）の画業について、日本美術・西洋美術との関連や影響という国際的視野で分析しなおし、再評価に挑んだ意欲的な労作である。傅抱石にみられた 1940 年代以降の新画風の確立の背景として、日本留学時代の足跡を追い、影響をうけた人物や著作物を探りあてる研究手法をとっている。傅抱石は毛沢東時代に中国の代表的な画家となるが、青年期に二度、日本へ留学しており、日本の画壇や美術教育から多大な影響を受けている。しかし、従来の研究では、日本留学中の傅抱石の活動追跡がきわめて表層的であり、具体的な調査研究がほとんどなされていなかった。本論文は、国内外の日本語、中国語、英語などの資料を広範に渉猟し、広く東アジアの美術動向のなかに、傅抱石の画業を位置づけている。これまで十分に解明されていなかった傅抱石の日本への留学動機、帝国美術学校在学中の活動内容、帰国後の画業への留学成果の活用などを調査・整理し、研究史上初めてその経緯を明らかにしている。

本論文の内容であるが、まず序章で傅抱石を研究する意義を述べる。傅抱石は郭沫若等を通じた政治との関連などから中国国内では知られた画家であるが、それに比して、日本や欧米では認識度が低い。日本とも縁の深い傅抱石を東アジア美術史という広いコンテクストで紹介する意義があるとする。第一部では傅抱石の渡日前の思想と行動を明らかにしている。日本への留学目的は西洋由来の芸術新知識の摂取であり、日本の中国画論を事前に研究していたこと、日本滞在時に金原省吾に師事を決める経緯や動機に触れている。第二部では、傅抱石が日本留学時に、渡欧を考え、西洋美術理論・油絵や彫刻の技法・地質学の三つを受容したことに着目する。とりわけ、地質学者で画家の高島北海の画論『写山要訣』に出会って大きな影響をうけ、「科学」的な地質学画論として評価し、中国語に訳して、中国で紹介した点を明らかにしている。第三部では、帰国後、傅抱石は洋画を棄てて中国画を描くが、西洋的要素を活用し、新画風を成立させたとする。その新画風は「印象派」的な画風・地質画論・歴史画・光と色彩の四つの新表現を備えていると指摘する。この新画風が郭沫若・陳之佛はじめ日本留学派の中国要人から支持され、≪東方紅≫など中国共産党と国家の象徴的絵画の制作にあたるようになった経緯が示されている。終章では、傅抱石の西洋美術への態度を、一貫性・科学性・民族性という三つの概念でまとめている。傅抱石は一貫性をもって西洋美術を意識していた。ただ西洋美術理論は科学性として扱い、優位性を認めない。むしろ、日本留学を通じてうけた西洋的要素の影響は言説上は隠し、中国美術の独自の伝統を語って民族性を強調していた。これまで先行研究も、この傅抱石自身の言説に影響されて、彼の新画風のなかにある西洋的要素に注目できていなかったとする。

本論文があげた成果は、以下の三点にまとめられる。

まず、傅抱石の留学中の活動の詳しい調査分析により、本人が日本留学を通していわゆる中国伝統保護論者から転向し、西洋美術に「開眼」した後、「中西融合」論者に変身していく精神的成長の軌跡を解明した点である。傅抱石は青年期に日本留学し、晩年には中国共産党の新中国の中心画家となった人物であり、その研究には大きな視点と細かな作業での分析と、広い観点からの総括を必要とする。国際的に史料を博捜して、論及が難しい著名画家の生涯にわたる分析を敢行して、新たな見方を提示した点は大いに評価できる。

次に、先行研究が全く顧みなかった地質学者で画家の高島北海と傅抱石の接点を発掘した点である。高島北海の著作『写山要訣』と、傅抱石の翻訳『写山要法』を比較分析した意義は大きい。傅抱石が如何にして絵画に「科学」という要素を入れ、その後の画業に応用し続けたかを説得的な証拠で示しており、傅抱石研究だけでなく、東アジアの美術交流史上も、重要な発見といえる。

最後に、傅抱石が日欧の画壇の影響をうけつつ、中国の伝統との融合を模索し、いかに自己の画業を進めていったのかを具体的に解明した点である。日本からの帰国後、各時期に描いた代表作の画風・画題・画法などを丁寧に整理したうえで、分析する方法をとり、傅抱石の画業の流れをみせている。また、この作業過程で、著者は多くの刺激的な新知見を示しており、そのいずれもが研究のさらなる深化に繋がっている。

このように、本論文の成果は大きいが、論及の範囲が広いだけに、今後の研究の深化が期待される部分もないわけではない。傅抱石を論じるなかで、日本画家・橋本関雪や清初の画家・石濤の評価について触れているが、この部分などは、もう少し深く掘り下げられそうである。また傅抱石の画家活動の全期間を分析しているが、時期ごとの画業の優劣の評価などについては抑制的な叙述がなされている。とはいえ、これらの点は、本論文の幅広い論及先について今後の研究の期待を高め、研究上の論点が示されるものであって、本論文の価値を損ねるものではない。審査委員会では、上記に掲げた本論文の研究上の画期的成果をふまえ、本専攻の学位論文として相応しいものと全員一致で判定した。